

天心の思い描いたもの

ぼかしの彼方へ

■ 5 ■

「空気を描く」という岡倉天心の課題に応じ、横山大観、菱田春草らが試みたのが、輪郭線を用いずに色のグラデーションによって描く表現であった。

「空気を描く」というときに思い描いたのは、西洋にもなかったような空気感、雰囲気、臨場感のようなものの表現ではなかっただろうか。

グラデーションによる表現は西洋絵画を意図したものとさえ考えられるが、天心はむしろ単に西洋の模倣を示唆した訳ではなかった

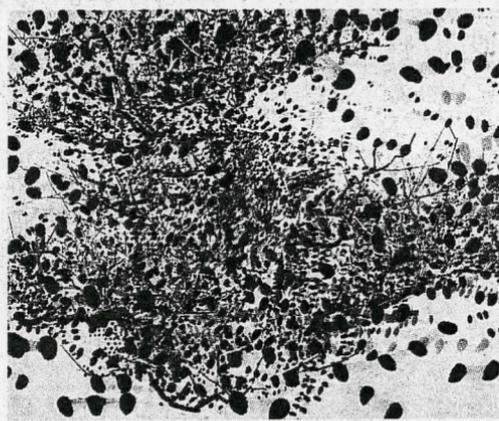
墨点の連続、空気を暗示

古く東西の美術を参照しながら、天心が訴えたのは、あくまで新時代に即した日本美術創造だった。

展覧会第2部は、そういつた未知なる絵画の可能性を美術の現在に探るべく、15人の作家を紹介している。

浅見貴子が描くのは身近な樹木である。スケッチを重ねて樹木の

浅見貴子「梅1101」
1・2014年、雲肌麻紙・墨・胡粉・顔料、パネル装、作家蔵



てはいないが、墨点の連続のうち鑑賞者は樹木の葉叢や枝の広がりを見てとり、さらには周辺の光や空気のようなものまでも感じるのではないだろうか。

天心はこうも述べている。「あらわに示すのではなく、暗示することこそ、無限に通ずる秘訣である」

(県近代美術館主任学芸員 井野功一)

(おわり)

「天心の思い描いたもの」ぼかしの彼方へ」は21日まで、県近代美術館で開催。問い合わせは同館 ☎029(2443)5111

1。